

## 「宇宙と落語のコラボレーション 吉笑ゼミ ～自分らしく考える～」

長谷川哲夫(チリ観測所)

2016年11月12日(土曜日)に東京・八王子の大学セミナーハウスで、落語と天文学の講義のコラボという珍しいイベントが開かれました。

大学セミナーハウスというと「大地に楔を打ち込む」本館をはじめとする独創的な建物群(建築家吉阪隆正氏とU研究室の作品)が有名ですが、「教師と学生が寝食をともにしながら議論し学ぶ場」と「国公私立の壁を超えたネットワーク構築の場」を創るという飯田宗一郎氏の先進的な理念のもとで、日本の高等教育、人材育成に大きく貢献してきました。その開館50周年記念会を締めくくるイベントとして、標記のセミナーは一般の参加者を含め約130名の聴衆を集めて行われました。

吉笑ゼミは全体で4部構成。①まず落語家の立川吉笑さんが自己紹介を兼ねて一席。②続いて長谷川が「宇宙の生命に科学でせまる」と題して講義。10分の休憩をはさんで③吉笑さんが再び登場、講義の内容を解釈しレポート提出よろしく即興落語を演じる。④最後は二人で対談しながら会場の質問を受けて終了・・・という段取りです。吉笑さんは立川談笑師匠のもとで研鑽する二つ目。擬古典の創作落語を得意としていて、これまでも放送作家や若手物理学者、DJやラップミュージシャン、実況アナウンサーなどを招いて年数回吉笑ゼミを開いており、今回が8回目。立川流らしく落語の現在的意味をアピールしつつチャレンジングに攻めている若手です(詳しくは吉笑さんの近著「現在落語論」毎日新聞出版をご覧ください)。

さて、長谷川の講義②では、私たちの体をつくっている炭素や酸素、カルシウム、鉄などの原子が、すべて星の核融合反応で残った「星の灰」であることを説明してから、太陽系外惑星の話題に移り、アルマ望遠鏡でみた惑星誕生領域の最新の研究成果を紹介しました。それを受けて、吉笑さんの即興落語③では、吉笑さんの体の中のさまざまな原子が擬人化されて登場。体内滞在15年という古株の炭素原子を中心に、ダイエットされて去って行った原子の話や、新入りの原子とのやり取りが展開します。人の体に入る前は何だったかの自慢比べでは、ある原子は吉笑さんの体に入る前はドアストッパーだったとか。ドアストッパーの原子と人間の原子ではどちらが「えらい」かなど、次々繰り出される話到场内は爆笑の連続となりました。

研究の話を聴くというと、どうしても聴く側にある種「受け身」の「構え」ができてしまいがちです。でも「吉笑ゼミ」では、落語で笑っているうちに場はすっかり打ち解けて、頭がノーガード状態になって「自分らしく考える」ノリで話を聴いていただけるようです。参加者のアンケートをみても「大変おもしろかった!!!」と満足いただけたようでした。研究者から伝えたい大事なメッセージをみなさんに届ける方法として、大きな可能性と手応えを感じた会でした。



▲図 01 ガツンと強烈な印象を与える大学セミナーハウスの本館建築（写真提供：大学セミナーハウス）



▲図 02 炭素原子の旦那を熱演する立川吉笑さん（写真提供：大学セミナーハウス）



▲図 03 最後はノーガード状態の頭でトークセッション (写真提供: 大学セミナーハウス)

『国立天文台ニュース』(2017年01号)より